大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

『枕草子』の基盤は和歌

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-09-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 片桐, 洋一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005088

『枕草子』の基盤は和歌

片桐洋一

一、『枕草子』の成立と書名

＊以下、『枕草子』の本文引用と章段番号は、石田穣二校注、角川ソフィア文庫『新版枕草子』によるが、わずかながら、私に訂正した箇所もある。

まず、三巻本『枕草子』の、いわゆる跋文を掲げよう。

この草子、目に見え、心に思ふことを、人やは見むとすると思ひて、つれづれなる里居のほどに書き集めたるを、あいなう、人のために便なき言ひ過ぐしもしつべき所々もあれば、よう隠し置きたりと思ひしを、心よりほかにこそ、もり出でにけれ。

宮の御前に、内の大臣のたてまつりたまへりけるを、（定子）「これに、なにを書かまし。上の御前には、史記といふ書をなむ書かせたまへる」など、のたまはせしを、（清少）「枕にこそはべらめ」と申ししかば、（定子）「さは、得てよ」とて、賜はせたりしを、あやしきを、こよやなにやと、尽きせず多かる紙を書き尽くさむとせしに、いとものおぼえぬことぞ多かるや。

おほかた、これは、世の中にをかしき言、人のめでたしなど思ふべき名を選りいでて、歌なども、木、草、鳥、虫をも、言ひいだしたらばこそ、思ふほどよりはわろし、心見えなりと、そしられめ、ただ心一つにおのづから思ふことを、たはぶれに書きつけたれば、ものに立ちまじり、人なみなみなるべき耳をも聞くべきものかはと、思ひしに、「はづかしき」なんどもぞ、見る人はしたまふなれば、いとあやしうぞあるや。げに、そもことわり、人のにくむをよしと言ひ、ほむるをもあしと言ふ人は、心のほどこそおしはからるれ。ただ人に見えけむぞ、ねたき。

左中将、まだ伊勢の守ときこえし時、里におはしたりしに、端の方なりし畳をさし出でしものは、この草子、乗りて出でにけり。まどひ取り入れしかど、やがて持ておはして、いと久しくありてぞ、かへりたりし。それよりありきそめたるなめりとぞ、本に。

よく知られている、この跋文は、『枕草子』の成立と流布の契機を記していて、重大である。文飾や虚構が混じっているという説もあるが、人物名を含めて、その記述は具体的であって、否定できないものを持っている。

まず、成立の契機であるが、すべては、定子中宮の御前に、内の大臣藤原伊周がたくさんの料紙を献上したことに発する。定子の兄伊周が内大臣であったのは、正暦五年（九九四）八月から長徳二年（九九六）四月までの二年足らずである。もっとも、後になって書かれたこの跋文が、それぞれの時点における人物の官名を正確に記述しているという保証はないが、一条天皇と定子中宮に同時に料紙を奉献しているのであるから、伊周が最も威勢のよかった内大臣時代の事跡と見るのが自然であろう。ところで、「天皇様の所では、この料紙に『史記』を書かれるということだが、こちらでは何を書こうか」と中宮がおっしゃったのに対して、清少納言は「枕にこそははべらめ」と答えたということであるが、この「枕」とは何か。多くの注釈は、「枕もとに置く手控えの草子」の意の普通名詞「まくらざうし」の略とするが、これでは『史記』と釣合いが取れない。それに対して、『史記』と同じく固有名詞と見て、清少納言が当時書きつつあった『枕の草子』のこととする説もある。跋文後半の流布の契機を延べている部分で、伊周が料紙を献上した時とほとんど同じ時期にあたる長徳元年（九九五）正月から長徳三年（九九七）正月までの二年間に伊勢守（実際は伊勢権守）であった左中将源経房が里居の清少納言を訪問して、偶然『枕草子』の写本を見つけて持ち帰ったのが流布のきっかけになったと言っているのであるから、「『史記』に対するものとして、私が今書いております『枕草子』を清書しましょう」と清少納言が言ったとする可能性はまったくないわけではない。しかし、「帝が、あの司馬遷の『史記』なら、こちらは、私が書いた『枕草子』にしましょう」と言うのは、「玉藻刈る沖辺は漕がじしきたへの枕のあたり忘れかねつも」（『萬葉集』巻一・七二）や「わが恋を人知らめやしきたへの枕のみこそ知らば知るらめ」（『古今集』恋一・五〇四）などに用いられている枕詞表現を踏まえて洒落て言っているにしても、あまりにもあつかまし過ぎるのではないか。『史記』→「敷き」→「枕」という連想で応じた、機智あふれ

る会話の一節ではあるが、あまりにもあつかまし過ぎて、その場を支配していたユーモア的雰囲気も消されてしまうのではないか。ここは、「しきたへの枕」という和歌表現を前提にしながら、「天皇様の方は、この紙に『史記』をお書きになるそうですが、私など、そのような漢字・漢文は書けないばかりか、仮名で和歌も書けません、せっかくの賜わり物ですが、無能な私としては、寝る時の枕にするほかありません」と応じたと見る方が自然ではないか。それに対して、駄々っ子のように甘える清少納言にやさしく対応する中宮は、「さは、得てよ（それじゃ、あなたにあげるから、好きなようになさい）」と言って清少納言に与えられたというわけである。

一方、清少納言は、「しきたへの枕」という和歌表現を前提にして、「私なんか何も書けません。できるのは、枕にして寝ることだけです」と謙虚に応じたつもりであったが、「さは、得てよ」と任せられてみると、「枕」と称するにふさわしいものを書かねばならない。天皇方が『史記』であれば、中宮方はとうぜん和歌の集が書かれるであろうと、紙を贈った伊周も、贈られた中宮定子も、内心は思っていたはずである。だから、表面は「こんなにたくさんの紙に何が書けましょう。才能のない私は、枕にして寝るほかありません」と謙虚ぶって言ってみたものの、次の瞬間には、やはり何か書かねばなるまい、そして「枕」ということばを生かすには、歌枕書のようなものを書かねばなるまい、と考えたのではなかったか。だから、続けて「おほかた、これは、世の中にをかしきこと、人のめでたしなど思ふべき名を（底本の「なほ」を校訂）選り出でて、歌などをも、木、草、鳥、虫をも言ひ出だしたらばこそ、…」と続けたのである。

つまり、天皇が書かせられるのが『史記』であるならば、中宮が書かせられるのは、仮名の文学、おそらくは「秀歌撰」の類であり、勅撰集撰者清原元輔の娘である清少納言がその中心人物としてふさわしいだろうと、おそらく伊周も、中宮定子も思っていたであろうことは、一六頁に後述する第九五段の「五月の御精進のほど…」の段の後半によって明らかであり、「何も書けません。寝る時の枕にするだけです」と答えた清少納言も、それは十分にわかっていたから、この「枕…」という発言のツケは、歌枕書のような、しかし、単なる歌枕書を超えたものを書くことによって果たさねばならないと思ったはずである。しかし、単に歌枕書に類したものであれば、「思ふほどよりはわろし、心見えなり」と、そしられるであろうから、「ただ心一つにおのづから思ふことを」、いわば独善的に「たはぶれに書きつけた」と言っているように、この跋文を支えている清少納言の志

向は、共通の文化、共通のことばであった和歌を前提にしながらも、その和歌を超越した個性的なおもしろさ、いわば「をかし」の文化というような世界にあったということなのである。

二、『枕草子』と狭義の歌枕

「このような立派な紙をたくさんいただいても、私には『史記』のようなものは書けません。寝る時の枕にするだけしか出来ません」と答えてみたものの、「枕」という語を生かして何かを書くとなると、清少納言がまず思ったのは、「歌枕」であったと思う。

拙稿「歌枕の成立—古今集表現研究—」（『国語と国文学』一九七〇年四月号、のち『古今和歌集の研究』所収）や、拙著『歌枕歌ことば辞典　増訂版』（一九九九年、笠間書院刊）の概説「歌枕　歌ことば」などに述べたように、歌枕と言う場合、狭義の歌枕と広義の歌枕があるという認識が、まず必要である。狭義の歌枕とは「名所歌枕」のことであり、広義の歌枕とは「歌ことば一般」のことである。

『枕草子』の、いわゆる「類聚的章段」には、このような狭義の歌枕も、広義の歌枕も多く見られるが、まず狭義の歌枕、すなわち名所歌枕から見よう。

〔一〇〕山は、小倉山。鹿背山。三笠山。このくれ山。いりたちの山。忘れずの山。末の松山。かたさり山こそ、いかならむと、をかしけれ。いつはた山。かへる山。後瀬の山。朝倉山、よそに見るぞをかしき。おほひれ山もをかし。臨時の祭の舞人などの思ひ出でらるるなるべし。三輪の山、をかし。手向山。待ちかね山。たまさか山。耳なし山。

「小倉山」「三笠山」「末の松山」「かへる山」「三輪の山」「手向山」「耳なし山」はそのまま『古今集』に見られるし、「鹿背山」は「衣かせ山」という形で同じく『古今集』に見られる。また「忘れずの山」「後瀬の山」「待ちかね山」は、『古今和歌六帖』に見られる。さらにまた「いつはた山」は『伊勢集』に、「たまさか山」は『元良親王集』に見られる。「朝倉山、よそに見る」は、『夫木抄』に「昔見し人をぞ我はよそに見し朝倉山の雲井はるかに」という歌が『古今六帖』の歌として見える。現存の『古今六帖』にこの歌はないが、後述する「ゆずる葉」と同様に、本来の『古今六帖』には存在していたのであろう。「おほひれ山」は、東遊歌の「片降」に「大ひれや　小ひれの山はや　寄りてこそ　寄りてこそ　山は夜らなれ　遠目はあれど」とある。増田繁夫氏も注しておられるように（和泉古典叢書『枕草子』補注）、賀茂や石清水の臨時の祭に、舞人が「求子」を舞

って退場する時にこの歌を歌ったので、「臨時の祭の舞人などの思ひ出でらるるなるべし」と記しているのである。このように、歌謡をも含んでいるが、全体的に見れば、いわゆる狭義の歌枕と言ってよいことばが並んでいるのである。

次は、「岡は」と「井は」の場合について見よう。

〔二三四〕岡は、船岡。片岡。鞆岡は、笹の生ひたるが、をかしきなり。かたらひの岡。人見の岡。

「船岡」は『拾遺集』雑秋のよみ人知らず歌に見えるほか、清少納言の父清原元輔の集にも見える京都紫野の大徳寺の西南にある岡。「片岡」は「片岡のあしたの原」という形で『古今集』から見られ、「鞆岡」は神楽歌「篠」に見える。通行本では「この笹は　いづこの笹ぞ　天にます　豊岡姫の　宮の御笹ぞ　宮の御笹ぞ」とあるが、『梁塵愚案抄』などでは、第三句以下を「とねりらが　腰にさがれる　鞆岡の笹」としている。「鞆岡は、笹の生ひたるが、をかしきなり」と言っているのは、それを前提にしているのである。「かたらひの岡」は所見がないが、『古今六帖』に見える「かたらひの森」の近くにあったのだろうか。清少納言より少しあとの女流歌人肥後の家集に見える。「人見の岡」の典拠は未詳。

〔一六三〕井は、ほりかねの井。玉の井。走り井は、逢坂なるがをかしきなり。山の井、などさしも浅きためしになりはじめけむ。飛鳥井は「みもひも寒し」とほめたるこそ、をかしけれ。千貫の井。少将の井。桜井。后町の井。

「ほりかねの井」は『古今六帖』に、「玉の井」は『道信集』に例がある。また「山の井」について「さしも浅きためしになりはじめけむ」と言っているのは、『古今集』仮名序の古注に引かれている『萬葉集』の「あさか山影さへ見ゆる山の井の浅くは人を思ふものかは」によっていることは明らかであり、「飛鳥井」について『みもひも寒し』とほめたるこそ、をかしけれ」と言っているのは、催馬楽「飛鳥井」の「飛鳥井に宿りはすべし　や　おけ　かげもよし　みもひも寒し　みまくさもよし」を承けているのである。また「走り井」は、『萬葉集』(巻七・一一二七)などでは、普通名詞としてよまれていたのだが、清少納言の父の清原元輔が「走り井のほどを知らばや逢坂の関引き越ゆる夕影の駒」(拾遺集・雑秋・一一〇八、前田家本元輔集)とよんだことを踏まえて、「逢坂なるがをかしきなり」と言っているのである。このようなところで父元輔の和歌の宣伝をしているのは、清少納言ならではのおもしろさである。

以上に見て来た章段に見られる地名のほか、『枕草子』における「山は、…」「岡は、…」「井は、…」「関は、…」「市は、…」

「橋は、…」「森は、…」「里は、…」「河は、…」「瀧は、…」「海は、…」などは、先行の和歌に由来する歌枕の集成を基本に据えて、神楽歌や催馬楽、東遊などの地名をも多く用い、さらには東三条院にあった「千貫の井」、小野宮にあった「少将の井」、内裏の常寧殿のそばにあった「后町の井」など和歌によまれるはずもない地名を加えてはいるが、骨子となったのは、狭義の歌枕と呼ぶべき和歌常識の基本であり、清少納言が書こうとした「枕」の基本が、歌枕、それも狭義の歌枕であったことは、はっきりしているのである。

三、『枕草子』と広義の歌枕

『五代集歌枕』という書がある。当時は勅撰集だと思われていた『萬葉集』のほか、『古今集』『後撰集』『拾遺集』『後拾遺集』の四勅撰集を合わせた五代の集によまれた名所和歌を類聚しており、編者は藤原範兼（一一〇七―一一六五）と言われている。

『五代集歌枕』は、和歌によまれた地名だけを類聚しており、まさしく狭義の歌枕の具体例を集めているのであるが、この『五代集歌枕』より少し前に成立したと思われる『能因歌枕』は、

天地をば、「あめつち」といふ。

道、「たまぼこ」といふ。

夜、「ぬばたま」といふ。又「ぬまたま」といふ。「むまたま」といふ。

という形で始まり、それと同次元で、

関をよまば、「あふさかの関」「白河の関」「衣の関」「不破の関」などよむべし。

河をよまば、「吉野川」「龍田川」「大堰川」などよむべし。

橋をよまば、「長柄の橋」「浜名の橋」「佐野の舟橋」ともよむべし。

などと、名所についても記すが、一方では、

「空蟬」とは、むなしきものにたとふ。せみのぬけたるかへりがらとも。

「夏虫」とは、女によりて身をいたづらになすものにたとふ。

「螢」とは、おもひかくれぬものにたとふ。

と記し、さらにまた、

春は、「霞しく」「あさみどり」「佐保姫」「梅の花」「桜」「鶯」。

夏は、「五月雨」「かげろふ」「白露」「やくもたつ」「卯の花」「ほととぎす」

秋は、「霧」「ひぐらし」「初雁」「時雨」「紅葉」「鹿の音」
冬は、「白露」「霜」「氷」「五節」「神楽」

と書いているように、地名だけではなく、「　」の中に示した「歌ことば一般」をも、歌枕として一括していたことを知る。これ、すなわち「広義の歌枕」である。

『能因歌枕』だけではない。清少納言と同時代の藤原公任が関与したかと思われる書に、『四条大納言歌枕』がある。伝本は現存していないが、藤原仲実（一〇五七～一一一八）の著といわれる『綺語抄』に何箇所か引用されている。

たとえば、

うらぶれて　『四条大納言歌枕』云、もの思ひて苦しげなるさまをいふ。

しづたまき　『四条大納言歌枕』には、いやしき人のたましゐをいふと云々。可尋。

などとあって、地名以外の歌ことばが「歌枕」と呼ばれる書物の中に含まれていたことが知られるのである。

なお、『梁塵秘抄』の今様には、

春の初めの歌枕　霞たなびく吉野山　鶯、佐保姫、翁草　花を見捨てて帰る雁

とあって、かなり後になっても、地名すなわち「狭義の歌枕」と、歌語一般を言う「広義の歌枕」が、区別がつかない形で一括されて、「歌枕」と呼ばれていたことが知られるのである。

このような前提で『枕草子』を見ると、前述した「狭義の歌枕」以外に、いわゆる「広義の歌枕」が随所に記されていることに気づく。

たとえば、前掲〔六一〕の「橘は、…」〔六二〕の「里は、…」というような名所歌枕の後に見える〔六三〕の「草は、…」がそうである。

〔六三〕草は、菖蒲。菰。葵、いとをかし。神代よりして、さるかざしとなりけむ。いみじうめでたし。物のさまも、いとをかし。澤瀉は、名のをかしきなり。心あがりしたらむと思ふに。三稜草。蛇床子。苔。雪間の若草。木蚋。酢漿。綾の紋にてあるも、異よりはをかし。

あやふ草は、岸の額に生ふらむも、げに頼もしからず。いつまで草は、またはかなくあはれなり。岸の額よりも、これは崩れやすからむかし。まことの石灰などには、え生ひずやあらむと思ふぞ、わろき。ことなし草は、思ふことをなすにやと思ふも、をかし。

忍ぶ草、いとあはれなり。道芝、いとをかし。茅花も、をかし。蓬、いみじうをかし。

山菅。日かげ。山藍。浜木綿。葛。笹。青つづら。なづな。苗。浅茅。いとをかし。

蓮葉、よろづの草よりもすぐれてめでたし。妙法蓮花のたとひにも、花は仏にたてまつり、実は数珠につらぬき、念仏して往生極楽の縁とすればよ。また花なきころ、緑なる池の水に、紅に咲きたるも、いとをかし。翠翁紅とも詩に作りたるにこそ。

唐葵、日のかげにしたがひて傾くこそ、草木といふべくもあらぬ心なれ。さしも草。八重葎。つき草、うつろひやすなるこそ、うたてあれ。

冒頭の「菖蒲」は、歌に用いる時は「あやめ」と言う。その他、「澤瀉」「蛇床子」「木蚋」「酢漿」「あやふ草」などを見ると、和歌にはよれまない草の名を、ことさらに羅列しているようにも見える。

しかし、「雪間の若草」は、『古今集』恋一・四七八の「春日野の雪間を分けて生ひ出で来る草のはつかに見えし君はも」を前提にしたことばであるし、以下、

＊菰

我妹子に恋ひつつあらずは刈り菰の思ひ乱れて死ぬべきものを（萬葉集・巻十一・二七六四、古今六帖・第六「こも」三八〇七）

＊葵

ちはやふる神の卯月になりにけりいざうちむれ葵かささむ（古今六帖・第六「葵」三九五一）

我こそや見ぬ人恋ふる病すれあふひならではやむ薬なし（拾遺集・恋一・六六五）

＊三稜草

つくま江に生ふるみくりの水はやみまだねもみぬに人の恋しさ（古今六帖・第六「みくり」三九五四）

恋すてふ狭山の池のみくりこそ引けば絶えすれ我や根絶ゆる（古今六帖・第六「みくり」三九五五）

＊苔

ときはなる松にかかれる苔見れば年のを長きしるべとぞ思ふ（古今六帖・第六「苔」三九五九）

石の上に生ひ出づる苔のねも入らず夜な夜な物を思ふ頃かな（古今六帖・第六「苔」三九六〇）

＊ことなし草

つまに生ふることなし草を見るからにたのむ心ぞ数まさりける（後撰集・恋二・六九七・庶明）

かざすとも立ちと立ちなむ無き名をばことなし草のかひやなからん（後撰集・雑三・一二二〇・貫之）

＊しのぶ草

（前略）かへりみもせぬ　わが宿の　しのぶ草生ふる　板間あらみ　降る春雨の　もりやしぬらん

（古今集・雑体・一〇〇二・貫之）

ゆく末の忍草にもありやとて露の形見も置かむとぞ思ふ

（拾遺集・雑下・四九九・元輔）

＊道芝

思はずもあれかしあやな道芝の人のふるせぬ我ならなくに

（古今六帖・第四「ないがしろ」二一二五）

消えかへりあるかなきかの我が身かなうらみて帰る道芝の露

（小大君集・六二）

夏の日のあしにあたればさしながらはかなく消ゆる道芝の露

（和泉式部集・二四）

道芝の露とおきゐる人により我がたまくらの袖もかわかず

（和泉式部集・八九三）

＊茅花（つばな）

つばなつむ浅茅が原のつぼすみれいま盛りなり我が恋ふらくは

（古今六帖・第四・三九〇八）

＊蓬（よもぎ）

我もふり蓬もやどに繁りにし門（かど）に音する人は誰そも

（古今六帖・第六「蓬」三九五六）

秋風やよもぎのやどに吹きぬらん声なつかしく鳴くきりぎりす

（古今六帖・第六・「蓬」三九五八）

＊山菅（やますげ）

あしひきの山菅（やますが）の根のねもころに我はそ恋ふる君がすがたに

（萬葉集・巻十二・三〇五一）

妹待つと三笠の山の山菅（やますげ）のやまずや恋ひむ命死なずは

（萬葉集・巻十二・三〇六六）

やますげの乱れ恋のみせさせつついはぬ妹かも年はへつつも

（古今六帖・第五「年へて言ふ」二五七〇）

＊日かげ（のかづら）

ときはなる日かげのかづら今日しこそ心の色に深く見えけれ

（後撰集・恋三・七三五・庶正）

＊山藍（やまあゐ）

あしひきの山藍にすれる衣をば神に仕ふるしるしとぞ思ふ

（拾遺集・雑秋・一一四九）

山高み沢に生ひたる山ゐもて摺（す）れる衣のめづらしな君

（古今六帖・第五「めづらし」二九四七）

＊浜木綿（はまゆふ）

み熊野の浦の浜木綿百重なす心は思へどただにあはぬかも

（萬葉集・巻四・四九六・人麻呂）

み熊野の浦の浜木綿幾重ね我より人を思ひますらむ
（古今六帖・第四「浜木綿」一九三五）

さしながら人の心をみ熊野の浦の浜木綿幾重なるらむ
（拾遺集・恋四・八九〇・兼盛）

＊葛（の葉）

秋風の吹き裏返す葛の葉のうらみてもなほうらめしきかな
（古今集・恋五・八二三・定文）

かれかねてしもにうつろふ葛の葉のうらみやせまし風につげつつ
（古今六帖・第六「葛」三八八二）

和泉なる信太の森の葛の葉の千枝に分かれて物をこそ思へ
（古今六帖・第二「森」一〇四九）

神無月時雨しぬらし葛の葉のうらこがる音に鹿ぞ鳴くなる
（拾遺集・冬・二一八・よみ人しらず）

＊笹（の葉）

笹の葉に置く霜よりもひとり寝るわが衣手ぞさえまさりける
（古今集・恋二・五六三・紀友則）

笹の葉に降りつむ雪のうれを重みもとくたちゆくわが盛りはも
（古今集・雑上・八九一・よみ人しらず）

＊青つづら

山がつの垣ほにはへる青つづら人はくれどもことづてもなし
（古今集・恋四・七四二・躬）

山高み谷べにはへる青つづら絶ゆる時なくあふよしもがな
（古今六帖・第六「青つづら」三八九一）

絶えぬとは言ひてしものを青つづらまた繰りかへし山人のうさ
（古今六帖・第六「青つづら」三八九三）

なき名のみたつたの山の青つづらまたくる人も見えぬところに
（拾遺集・恋二・六九九・よみ人しらず）

＊なづな

雪を薄み垣根に摘める唐なづななづさはまくのほしき君かな
（拾遺集・雑春・一〇二二・長能）

＊浅茅

思ふよりいかにせよとか秋風になびく浅茅の色ことになる
（古今集・恋四・七二五・よみ人しらず）

＊蓮葉

蓮葉の濁りにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく
（古今集・夏・一六五・遍昭）

蓮葉の上はつれなき裏にこそ物あらがひはつくと言ふなれ
（後撰集・恋五・九〇三・よみ人知らず）

＊さしも草

あぢきなやいぶきの山のさしも草おのが思ひに身をこがしつつ
（古今六帖・第六「さしもぐさ」三五八六）

なほざりにいぶきの山のさしも草さしも思はぬことにやはあらぬ　（古今六帖・第六「さしもぐさ」三五八八）

かくとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを　（実方集・一二一）

＊八重葎（やへむぐら）

八重むぐらしげきやどには夏虫の声よりほかにとふ人もなし　（後撰集・夏・一九四・よみ人知らず）

なにせむに玉のうてなも八重むぐらいづらむ中にふたりこそ寝め　（古今六帖・第六「むぐら」三八七四）

八重むぐら心のうちにしげければ花見にゆかむいでたちもせず　（古今六帖・第六「やへむぐら」三八七二）

＊つき草

つき草に衣はすらむ朝露に濡れてののちはうつろひぬとも　（古今集・秋上・二四七・よみ人知らず）

いで人は言のみぞよきつき草のうつし心は色ことにして　（古今集・恋四・七一一・よみ人知らず）

世の中の人の心はつき草のうつろひやすき色にぞありける　（古今六帖・第六「つき草」三八四四）

つとに咲きゆふべは消ゆるつき草のけぬべき恋も我はするかな　（古今六帖・第六「つき草」三八四五）

のように、和歌に頻繁に用いられる、いわば「広義の歌枕」と言ってよい語彙が並んでいるのである。

勅撰集撰者という名誉をになう清原元輔の娘であるが、和歌は必ずしも得意でなかったので、意識して和歌から遠ざかって『枕草子』という散文を書いたのだというような、短絡的で幼稚な論を説く向きもあるが、右のような実例を見る時、清少納言が、当時の一般的教養であった和歌的知識を基盤にしていたことは否定し得べくもないのである。

四、清少納言の和歌知識
——付『古今六帖』と『拾遺集』

ところで、清少納言に限らず、当時の教養人は、このような歌ことば（広義の歌枕）を語彙の知識としてだけ知っていただけではない。その歌ことばが、どのような歌において、どのように用いられていたかを承知していたのである。

私が初めて歌枕について論じたのは、前掲の「歌枕の成立—古今集表現研究—」であったが、そこで私が述べたことは、「狭義の歌枕」であれ、「広義の歌枕」であれ、歌枕は、本歌取りによって、いま歌に詠まれようとしている自然的事物事象、つまり所の名や景物と、先行の和歌によって既に形成されている特定の人事

的事象や心象とが結合することによって成立するということであったが、『枕草子』における和歌的語彙の利用も、まさしく同じ趣きを呈していると言ってよいようである。

〔三七〕花の木ならぬは、かへで。桂。五葉。そばの木。しななきここちすれど、花の木散り果てて、おしなべて緑になりにたる中に、時もわかず濃き紅葉のつやめきて、思ひもかけぬ青葉の中よりさし出でたる、めづらし。

まゆみ、さらにも言はず。そのものとなけれど、宿木といふ名、いとあはれなり。榊、臨時の祭の御神楽のをりなど、いとをかし。世に木どもこそあれ、神の御前のものと生ひはじめけむも、とりわきてをかし。

楠の木は、木立多かる所にも、ことにまじらひ立てらず、おどろおどろしき思ひやりなどうとましきを、千枝に分かれて、恋する人のためしに言はれたるこそ、誰かは数を知りて言ひはじめけむと思ふに、をかしけれ。

檜の木、また、け近からぬものなれど、三葉四葉の殿つくりもをかし。五月に雨の音をまなぶらんも、あはれなり。

かへでの木のささやかなるに、萌えいでたる葉末の赤みて、同じ方にひろごりたる葉のさま、花もいとものはかなげに、虫などの枯れたるに似て、をかし。

あすはひの木、この世に近くも見え聞えず。御嶽に詣でて帰りたる人などの持て来める。枝ざしなどは、いと手触れにくげにあらくましけれど、なにの心ありて、あすはひの木とつけけむ。あぢきなきかね言なりや。誰にたのめたるにかと思ふに、聞かまほしく、をかし。

ねずもちの木、人なみなみなるべきにもあらねど、葉のいみじうこまかに小さきが、をかしきなり。楝の木。山橘。山梨の木。

椎の木。常磐木はいづれもあるを、それしも、葉がへせぬためしに言はれたるも、をかし。

白樫といふものは、まいて深山木の中にもいとけ遠くて、三位、二位の袍染むるをりばかりこそ、葉をだに人の見るめれば、をかしきこと、めでたきことに取り出づべくもあらねど、いつともなく雪の降り置きたるに見まがへられ、素盞烏尊、出雲の国におはしける御ことを思ひて、人麿が詠みたる歌などを思ふに、いみじくあはれなり。をりにつけても一節あはれとをかしとも聞きおきつるものは、草、木、鳥、虫も、おろかにこそおぼえね。

ゆづり葉の、いみじうふさやかにつやめき、茎はいと赤くきらきらしく見えたるこそ、あやしけれど、をかし。な

べての月には、見えぬものの、師走のつごもりのみ時めきて、亡き人の食ひ物に敷く物にやと、あはれなるに、また、齢を延ぶる歯固めの具にも、もて使ひためるは、いかなるにか。「紅葉せむ世や」と言ひたるも、頼もし。

柏木、いとをかし。葉守の神のいますらむも、かしこし。兵衛の督、佐、尉など言ふも、をかし。

姿なけれど、棕櫚の木、唐めきて、わろき家のものとは見えず。

長すぎるほどに長い引用になってしまったが、ここに記されている個々の語は、まさしく前述した広義の歌枕というべきものであって、典拠となる和歌を参考にあげるべきだが、いたずらに紙数をとることを避けて、特別に和歌の知識がなければ、理解し難いような場合だけを列挙して、その典拠になる歌などを注することにする。

「榊」　『古今集』神遊歌一〇七四

神垣のみむろの山の榊葉は神の御前にしげりあひにけり

「楠」　『古今六帖』第二「森」一〇四九

和泉なる信太の森の楠の葉の千枝にわかれて物をこそ思へ

「檜」　『古今集』仮名序

この殿はむべも富みけりさきくさの三葉四葉に殿つくりせり

「椎」　『拾遺集』雑恋・一二三〇

はし鷹のとかへる山の椎柴の葉がへはすとも君はかへせじ

「白樫」　『拾遺集』冬・二五二

あしひきの山路も知らず白樫の枝にも葉にも雪の降れれば

＊ただし、静嘉堂文庫本『拾遺抄』には、

「曽佐のをのみことの出雲国にいたるときの歌にいはく」という詞書で「人麿」の歌とする。

また『萬葉集』巻十に「柿本朝臣人麻呂の歌集に出づ」という注をともなってあるが、素盞烏尊に関連させる伝承は、平安時代後期の歌学書以外では静嘉堂文庫本『拾遺抄』しか記されていない。

「ゆづる葉」

旅人の宿かすが野のゆづる葉のもみぢせんとや君をわすれん

＊『夫木抄』巻二十二・九六七八と巻二十九・一四〇四四に『古今六帖』の歌として引くが、現在の『古今六帖』には見えない。しかし、『古今六帖』の題によってよまれた『新撰六帖』にも「ゆづる葉」の歌が見えるので、清少納言が見た『古今六帖』にあったことは確実。

「柏木」　『大和物語』六十八段（とし子）

柏木に葉守の神のましけるを知らでぞ折りしたたりなさるな

＊『後撰集』雑二（一一八三）にもあるが、初句「楢の葉に」。

というように、いずれもが和歌的な知識に依拠して記しているのであるが、木の名のそれぞれに特別の意味・概念を与えているのは、まさしく「歌枕」の扱いと同じである。

以上のように見てくると、『枕草子』の類聚章段、特に「〇〇は××。……」という書き出しで始まる諸段は、まさしく歌枕を意識して書かれていることは間違いないと言ってよいと思うのであるが、「歌枕」を意識してこのように書き上げた清少納言が、座右に置いて、特に愛用した歌書が二つあることに注意しておきたい。

その第一は、『古今六帖』の利用であり、第二は『拾遺抄』『拾遺集』の利用である。

まず『古今六帖』から言えば、正式の名は『古今和歌六帖』。『萬葉集』時代から『後撰集』時代までの歌、約四五〇〇首（重出歌を含む）を、六帖、二五項目、五一七の題に分類して数首ずつの例歌をあげた大部の書であるが、一面、「歌題別和歌総合便覧」とも言える便利な書であった。『源氏物語』を書いた紫式部も、愛用していたことを証し得るが、清少納言も『枕草子』を書くにあたって、利用した可能性は、前章に揚げた例と、右に示した例によって、疑いないところである。清少納言の知識教養の基本は、まさしく和歌的な知識、すなわち狭義・広義の歌枕であり、そのために座右に置いて日夜利用していた最大最高の資料は、この『古今六帖』だったのである。こつこつと「歌題別和歌総合便覧」を調べつつ『枕草子』を書いている清少納言の姿は、従来作られてきたイメージと大いに異なるかも知れないが、事実として率直に認めざるを得ないのではないかと思うのである。

次に注意すべきは、『拾遺抄』と『拾遺集』の歌をよく引いていることである。

既に引用した時に示したが、清少納言は『拾遺集』の歌をよく引いているかに見えるが、実は『拾遺抄』と『拾遺集』の両方を引いているのである。

『拾遺抄』は、花山上皇が藤原公任に命じて撰ばせた勅撰和歌集であるが、当時の人が勅撰和歌集だと思い込んでいた『萬葉集』も二十巻、平安時代最初の勅撰和歌集である『古今集』も二十巻、それに続く『後撰集』も二十巻であったが、公任は、何故か、十巻、約六〇〇首の勅撰集を作ったのである。種々の

内部徴証からして、長徳三年（九九七）の成立であることは疑えないが、長徳三年と言えば、清少納言は、その六月～七月に中宮定子に従って職の曹司に入っている（『枕草子』八三段）。

それに対して、『拾遺集』は、その『拾遺抄』が十巻形態であることに、おそらく満足できなかった花山上皇が、『古今集』『後撰集』と同じ二十巻の形態に改めたのであろう。伝本によって異なるが、一三五一首から一三六〇首。『拾遺抄』の二倍以上の規模になっている。伝えられる長能、道済のような協力者はいたであろうが、花山上皇の親撰と見てよかろう。完成は寛弘二年か三年（一〇〇五～六）。定子皇后が御産によって逝去してから五年か六年も後のことである。

さて、『枕草子』には、『拾遺抄』にあってそのまま『拾遺集』にも残っている歌の影響を受けた記述と、『拾遺集』の段階で付加された歌の影響によって書かれた記述があるわけだが、一三頁に述べた素盞烏尊の歌とする伝承のように、静嘉堂文庫本『拾遺抄』によったかと思われるケースもないわけではないが、五頁にあげた父元輔の「走り井のほどを知らばや…」の歌（集・一一〇八）、八頁にあげた「…あふひならではやむ薬なし」の歌（集・六六五）、九頁にあげた元輔の「ゆくすゑの忍草にも…」の歌（集・四九九）、一〇頁にあげた「…葛（くず）の葉のうらこがるねに鹿も鳴くなり」の歌（集・二一八）、「なき名のみたつたの山の青つづら…」の歌（集・六九九）、「雪を薄み垣根に摘める唐なづななづさはまくのほしき君かな」（集・一〇二二）、一三頁にあげた「はしたかのとかへる山の…」（集・一二三〇）は、『拾遺抄』にはなく、『拾遺集』のみにあるというケースに属するのである。

もっとも、集・一一〇八の「走り井のほどを知らばや…」は、前田家本『元輔集』に見えるし、集・四九九の「ゆくすゑの忍草にも…」の歌は書陵部（五〇一・一二六）本『元輔集』に見え、それらから採歌された可能性もある。父元輔の家集だから、早くから清少納言が知っていたと考えることは勿論許されるが、読者である清少納言の周辺にいた人々が、『拾遺集』成立以前に、それに収められるこの歌を熟知していたかということになると、首を傾げざるを得ないのである。

一方、集・六六五の「…あふひならではやむ薬なし」の歌、集・二一八の「…葛の葉のうらこがるねに…」の歌、集・六九九の「なき名のみたつたの山の…」の歌、集・一二三〇の「はしたかのとかへる山の椎柴の…」の歌などは、人口に膾炙した、有名な歌ではあるが、『拾遺集』に選ばれて有名になったのであって、清少納言の周辺の人々が、『拾遺集』以前の段階で、どこまで知っていたかわからないのである。もっとも、これらの歌

が、『拾遺抄』になかったからと言って、寛弘二、三年（一〇〇五～六）に成立した『拾遺集』によって、初めて採歌されたと断言することもできないが、これだけの歌が揃って引かれているということは、時代が近いだけに、『拾遺集』によった、もしくは『拾遺集』によって記憶がよみがえった…と考えてみてよいのではないかと思うのである。

これをどのように考えるか。『枕草子』の成立と流布が、第一章に掲げた跋文の言う如くであるとすれば、『枕草子』の成立は、源経房が左中将になった長徳四年（九九八）十月以前、さらに具体的に言えば、伊勢権守を兼任していた長徳元年（九九五）から同二年（九九六）までの間としなければならぬことになるが、それより一〇年も後に成立した『拾遺集』の歌を用いているのは説明がつかない。一首や二首なら、『拾遺集』以前から人口に膾炙して知られていたと考えられるが、これだけの数になると、やはり最新の勅撰和歌集である『拾遺集』によって、人々の間で話題になっていた歌として、その語句を用いたと考える方が自然である。筆者である清少納言と共通の知識教養を基盤に持った享受者の存在を前提として『枕草子』は書かれていると思うからである。

このように見てくると、現在の『枕草子』の成立は、長徳元年（九九五）か、その翌年の成立とする通説よりも一〇年以上も後、おそらくは寛弘五、六年（一〇〇八―九）頃ではなかったかと思われるのであるが、それよりも、私がここで言いたいことは、清少納言が、『枕草子』成立の最後の最後まで、いわば最新の和歌的知識、狭義・広義の歌枕を表現の基盤に据えるべく努力していたということなのである。

五、『枕草子』の基盤としての和歌生活

このように、最後の最後まで、歌枕にこだわっていた清少納言は、摂関家出入りの歌人であり、『後撰集』の撰者でもあった清原元輔の娘であることを常に意識していた。

〔九五〕の「五月の御精進のほど、職におはしますころ、…」の段、ほととぎすが好きで好きでたまらない清少納言は数名の朋輩とともに、車に乗ってほととぎすの声を聞きに出かける。中宮定子の伯父にあたる高階明順の邸に立ち寄って、お手製の下蕨の田舎料理を御馳走になり、季節の花である卯の花で車を飾り立てて帰る途中、故太政大臣為光邸の傍らに車を停めて、為光六男の侍従殿（藤原公信）とからみ合ったという、中関白家や中宮定子の威信を前提にしなければ考えられないような行動をしつつ、帰って来る。

さて、その二日後のこと、

二日ばかりありて、その日のことなど言ひ出づるに、宰相の君、「いかにぞ。手づから折りたりと言ひし下蕨は」と、のたまふを、聞かせたまひて、(定子)「思ひいづることのさまよ」と笑はせたまひて、紙の散りたるに、

下蕨こそ恋しかりけれ

と書かせたまひて、(定子)「本言へ」とおほせらるるも、いとをかし。

ほととぎすたづねて聞きし声よりも

と書きてまゐらせたれば、(定子)「いみじううけばりたりや。かうだに、いかでほととぎすのことをかけつらむ」とて、笑はせたまふも、はづかしながら、(清少)「なにか、この歌、すべて詠みはべらじ、となむ思ひはべるを、もののをりなど、人の詠みはべらむにも、『詠め』などおほせらるれば、えさぶらふまじきここちなむしはべる。いといかがは、文字の数知らず、春は冬の歌、秋は梅の花の歌などを詠むやうはべらむ。されど、歌詠むと言はれし末々は、すこし人よりまさりて、『そのをりの歌は、これこそありけれ。さは言へど、それが子なれば』など言はるればこそ、甲斐あるここちもしはべらめ。つゆとりわきたる方もなくて、さすがに歌がましう、我はと思へるさまに、最初に詠み出ではべらむ、亡き人のためにも、いとほしうはべる」と、まめやかに啓すれば、笑はせたまひて、(定子)「さらば、ただ心にまかす。我は詠めとも言はじ」と、のたまはすれば、(清少)「いと心やすくなりはべりぬ。今は、歌のこと思ひかけじ」など言ひてあるころ、庚申せさせたまふとて、内の大臣殿、いみじう心まうけせさせたまへり。

前半部の、中宮の御前に侍して話している記事を見ると、定子中宮が清少納言から聞きたかったのは、ほととぎすの声を聞きに行ってよんだ歌であったことがわかる。何か変わったことがあると、それを歌語りのように、中宮の御前で、歌を中心として、話すことが期待されているのに、清少納言らは、御馳走になった下蕨の話ばかりしている。中宮は、じれったくなったのか、手近にあった紙に、「下蕨こそ恋しかりけれ（食べた下蕨だけが恋しく思われているのだね）」と書いて、「この歌の上句をつけなさい」とおっしゃる。無理にでも、歌をよませようとしているのである。

それに対して、清少納言は「ほととぎすたづねて聞きし声よりも」と書いて御覧に入れる。中宮は「このような変なほととぎすの歌を、どうして書いたのでしょう」と言ってお笑いにな

る。清少納言は恐縮しながらも、ちゃんとしたほととぎすの歌をよんでお見せしなかった理由として、「実は、私は、一切、歌はよまないでおこうと決意しています。歌にかかわって、父元輔の名を汚すことを恐れるからです。無理によませなさるのであれば、お仕えすることをやめねばなりません」と真剣に申しあげる。

しかし、〔二六一〕の「うれしきもの」の段に、

　ものをり、もしは人と言ひかはしたる歌の、聞こえて、打聞きなどに書き入れらるる。みづからの上にはまだ知らぬことなれど、なほ思ひやるよ。

と記している清少納言のことを熟知している中宮は、それに対して、内心は、また始まったと思ったのであろう、「それじゃ、好きになさい。今後は『詠め』とは言わないから」と笑っておっしゃる。一〇歳年上とは思えぬ清少納言の甘えぶりであり、一〇歳年下とは思えぬ中宮の大きな優しさである。

ちょうどその時、庚申を過ごすべく内大臣伊周が登場する。そして、早速、女房たちの歌会である。

　夜うちふくるほどに、題出だして、女房に歌詠ませたまふ。みなけしきばみ、ゆるがし出だすに、宮の御前近くさぶらひて、もの啓しなど、ことことをのみ言ふを、大臣、御覧じて（伊周）「など、歌は詠まで、むげに離れゐたる。題取れ」とて、賜ふを、（清少）「さることうけたまはりて、歌詠みはべるまじうなりてはべれば、思ひかけはべらず」と申す。（伊周）「異様なること。まことに、さることやははべる。などか、さは許させたまふ。いとあるまじきことなり。よし、異時は知らず。今宵は詠め」など責めさせたまへど、げによう聞きも入れでさぶらふに、皆人々、詠みいだして、よしあしなど定めらるるほどに、いささかなる御文を書きて投げ賜はせたり。見れば、

（定子）元輔が後と言はるる君しもや今宵の歌にはづれてはをる

とあるを見るに、をかしきことぞたぐひなきや。いみじう笑へば、「なにごとぞ、なにごとぞ」と大臣も問ひたまふ。（清少）その人の後と言はれぬ身なりせば今宵の歌をまづぞ詠ましし

「つつむことさぶらはずは、千の歌なりと、これよりなむ出でまうで来まし」と啓しつ。

先程、中宮からは、「今後、歌をよめとは言わない」という約束をいただいたのだが、内大臣はそれを知らない。大臣が臨席した中宮御前の女房たちの歌会である。「何故詠まないのだ。と

にかく、今宵は詠め」とおっしゃるけれど、詠まないでがんばっていると、中宮は、ちょっと書いた紙を投げてよこされた。それには、「元輔がのちといはるる君しもや…（勅撰集撰者清原元輔の子といわれるあなたが、今宵の歌会に加わらで、側に控えていてよいのですか）」と書いてある。「歌はよまなければならないのなら、宮仕へを辞します」とまで言った自分に対して、今、ここに示された、優しい御心。しかも直接言葉にはせず、このような「をかしき歌」を書いて、側にお投げになる。清少納言としては、思わず笑ってしまって、わだかまりがなくなることを計算した、まさに中宮の素晴らしい「場」の演出である。大臣も、それを見て「何だ、何だ」とお尋ねになる。

そこで、清少納言が詠んだ歌、「その人ののちといはれぬ身なりせば…（もしも私が誰それの子と言われない身であったら、今宵の歌を、まっ先に詠みましょうに）」と詠み、「つつむことさぶらはずは、千の歌なりと、これよりなむ出でまうで来まし（元輔の子であることを遠慮する気持ちがなければ、千首の歌でも、私から詠み申しあげますのに）と言上したというのである。

清少納言は、歌を詠むにあたって、清原元輔の子であることに、何故このように意識過剰になっていたのであろうか。萩谷朴氏の見解を、誰もが読みやすい『新潮古典集成　枕草子』の頭注によって示せば、

「つつむ事」とは、単に重代の歌人の子として、精神的な負担が多いということだけを指すのではあるまい。そのことは既に和歌の中に「その人ののち」と表明されているから、啓上の言葉と重複することとなる。彼女は、父元輔が、あまりにも多作即詠の歌人であり、かつ古歌に通暁するあまり、しばしば古歌に酷似して剽窃にも等しい作品を発表していたことを、ひそかに気付いて恥じていたものかと思われる。しかも、清少納言自身も、父の轍を踏んで、独創の歌を詠むよりも、古歌に密着した和歌が、安易に口をついて出てくることを慣れて、むしろ意識して詠歌を避ける傾向があったものと推測される。つまり、清少納言は、父元輔を尊敬すると同時に、その長所も短所もともに近似している自己の中に、父の影を見出して、自己を嫌悪することさえあったのであろう。

とある。当時、古歌に密着した和歌を詠むことは、まったく恥ずべきことではなかったし、剽窃歌人という烙印が、『元輔集』に貫之・忠岑・伊勢・素性・深養父・中務・躬恒・清正・是則などの歌が多く混入していることを根拠にして捺されているの

であれば、勝手な誤解というほかはない。

これについては、『元輔集』に四十八首もの先人の詠歌が存在していることを明らかにされた後藤祥子氏が、労作『私家集注釈叢刊6元輔集注釈』（貴重本刊行会刊）の五一七頁に、「元輔が自分の歌群に貫之作その他をまぎれこませて奉献したとは考えられない」と述べ、何らかの事情があって、元輔が、先人の「屏風歌集成」を編集したのであろうと言っているのに私も従いたい。『伊勢集』の巻末部分に古歌の秀歌選が混入しているケースと同じように、おそらくは元輔自身が撰集した「古歌の秀歌選」が混入したものと考えてよいと思う。これをもって元輔を「剽窃歌人」と極め付け、娘の清少納言がそれを恥じていたというような偏見には与することはできないのである。

前述したように、既によまれている先人の歌の一句を、歌枕として口にし、耳にすることによって、「あはれ」で「をかしき」「みやびの場」は存在していたのであるが、（二六三段）「関白殿、二月二十一日に、法興院の積善寺といふ御堂にて…」で始まる長い章段を見よう。

関白道隆と中宮定子の前での会話の場面、

殿おはしませば、寝くたれの朝顔も時ならずや御覧ぜむと、引き入る。おはしますままに、（道隆）「かの花は失せにけるは。いかで、かうは盗ませしぞ。いとわろかりける女房たちかな。いぎたなくて、え知らざりけるよ」と、驚かせたまへば、（清少）「されど、我より先に、とこそ思ひてはべりつれ」と、忍びやかに言ふに、いととう聞きつけさせたまひて、（道隆）「さ思ひつることぞ。よに、異人出でゐて見じ。宰相と、そこのほどならむと、おしはかりつ」と、いみじう笑はせたまふ。（定子）「さりけるものを、少納言は春の風におほせける」と、宮の御前のうち笑ませたまへる、いとをかし。（道隆）「そら言をおほせはべるなり。今は山田も作るらむものを」など、うち誦ぜさせたまへる、いとなまめき、をかし。（道隆）「さても、ねたく見つけられにけるかな。さばかりいましめつるものを。人の御方には、かかるいましめ者のあるこそ」など、のたまはす。（道隆）「春の空は、そらにいとかしこうも言ふかな」など、またうち誦ぜさせたまふ。（定子）「ただ言には、うるさく思ひよりてはべりし。今朝のさま、いかにはべらまし」などぞ、笑はせたまふ。小若君、「されど、それをいととく見て、『露に濡れたる』と言ひける、面伏せなり、と言ひはべりける」と申したまへば、いみじうねたがらせたまふも、をかし。

五行目の清少納言のことば「我より先に」は、『忠見集』の「桜

見に有明の月に出でたれば我より先に露ぞおきける」という歌によっている。また九行目の定子中宮のことば「さりけるものを、少納言は春の風におほせける」は、『古今六帖』第二・九六七に「山田」という題で収められている「山田さへ今はつくるを散る花のかごとは風におほせざらなむ」によっているし、関白道隆もその歌を知っていたゆえに、「今は山田も作るらむものを」と応じて、その歌を「うち誦ぜさせたま」うたのである。傍にいた若小君という女房が「されど、それをいととく見て、『露に濡れたる』と言ひける、面伏せなり、と言ひはべりける」と申しあげたというのは、『拾遺集』別部の「題知らず　よみ人知らず」の「桜花露に濡れたる顔見れば泣きて別れし人ぞ恋しき」によっている。

このように、父の道隆、兄の伊周を含めて、中宮定子の周辺の文華を支えているのは、まさしく和歌であったことは明白である。そのような場において、「私は和歌をよみたくない」と清少納言が言えるのは、和歌が得意でなかったからでも、『枕草子』に見られるような散文の才能の方が勝っていたからでもなく、和歌的教養、和歌的文化を基盤にした、そのような場において、勅撰集撰者清原元輔の娘であるということが突出するのを遠慮したからであろう。実際、清少納言は、歌が嫌いでもなかったし、下手でもなかった。自信も実は持っていたのである。だからこそ、「勅撰集撰者の娘という日で見られるのでなければ、千首でも詠みます」と言っているのである。

このように、清少納言自身においても、清少納言が仕えていた「場」においても、和歌は必要欠くべからざるものであった。彼女自身は、だからこそ、勅撰集撰者清原元輔の娘として突出することを避けようと常に心がけていたのであるが、その意識とは裏腹に、実は「歌ことば実例大観」とも言うべき『古今六帖』をよく勉強していたし、最新の勅撰和歌集である『拾遺和歌集』にも早速目を通していたのである。自然に対しても、人間に対しても、絶えず目配りを絶やさなかった清少納言は、和歌に対しても絶えず目配りをしていたのである。

清原元輔に剽窃歌人という烙印を押したり、清少納言は和歌が嫌いだったから『枕草子』を書いたと極め付けて足れりとするのではなく、その作品の裏に隠された清少納言の努力と才能を明らかにするためには、その作品に対する共感と、実証的分析力が最も必要であると思うのである。

平安時代文学の研究を始めて五十年、そのうち四十五年間は、大学で平安時代の物語と和歌を教えて来たが、その間、私が、

いつも学生に言って来たことは、「平安文学で最も大切なものは和歌である、和歌を徹底的に勉強すれば、物語も自然にわかるようになるが、物語をどれだけ勉強しても和歌はわからない」ということであったが、今回、今までは講義したこともない『枕草子』について話す機会を与えられて、『枕草子』と和歌の関係においても、同じことが言えると思うようになった。

『枕草子』という作品は、書かれていることだけを読むのではなく、書かれていないことを読むという姿勢をとると、見えないことが次々と見えてくる。その見えないところを復原するための最も有効な鍵は、和歌の知識だと言ってよいのではないかと思うのである。

※本稿は二〇〇五年七月十八日に行われた大阪府立大学日本言語文化学会の第一回大会における講演「枕草子の成立とその基盤」を文章にしたものである。

（かたぎり　よういち・大阪女子大学名誉教授）